

日本短篇小说全集

10

短篇文学全集
10

田独歩
一雄
潤三



責任編集 臼井吉見

筑摩書房

日本短篇文学全集 第10巻

昭和43年 8 月25日第一刷発行

国木田 独歩

著 者 尾 崎 一 雄

庄 野 潤 三

発行者 竹之内 静雄

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

郵便番号 101—91

電話 東京(291)7651

振替 東京4123

製版・明和印刷

印刷・多田印刷

製本・鈴木製本

定価 360円

目次

国木田独歩

春の鳥 三

牛肉と馬鈴薯 三

運命論者 三

号外 三

疲労 七

窮死 七

尾崎一雄

虫のいろいろ 七

鑑賞（山室 静）……………二四五

装帧 枅折久美子

国木田独歩

国木田独歩（一八七一—一九〇八）

明治四年下総国銚子に生れた。父は旧播州竜野藩士。明治七年母に伴われ上京、父と下谷に住んだ。父の裁判所勤務に従い広島、岩国、山口に住み、明治二十年上京、法律学校、東京専門学校に学び、東京専門学校では改革運動をやり退学。一番町教会にて受洗し「青年文学」などに寄稿をはじめた。大分県佐伯鶴谷学館の教頭に赴任。明治二十七年国民新聞社に入社、「国民之友」編集者となる。佐々城信子と結婚、まもなく離婚。明治三十一年、「独歩吟」「武蔵野」「忘れえぬ人々」を発表、また榎本治と結婚。三十四年「武蔵野」刊行。「近事画報」「新古文林」を出し独歩社を創め苦闘しながら「独歩集」「運命」「薔声」を刊行、文名は定まった。四十一年肺結核のため茅ヶ崎南湖院にて死去。「独歩集第二」「渚」「欺かざるの記」「独歩書簡」「独歩小品」などは歿後出版された。

春の鳥

(一)

今より六七年前、私は或地方に英語と数学の教師をして居たことが御座います。その町に城山しろやまというのがあって大木暗く繁った山で、余り高くはないが甚だ風景に富んで居ましたゆゑ私は散歩がてらいつもこの山に登りました。

頂上には城趾が残って居ます。高い石垣に蔦葛つたかつらからみ附いてそれが真紅に染って居る塩梅あんばいなど得も言われぬ趣おもむきでした。昔は天主閣の建って居た処が平地になって、いつしか姫小松疎ひめこまつまばらに生いたち夏草隙間すきまなく茂り、見るからに昔を偲しのばす哀れな様さまとなつて居ます。

私は草を敷いて身を横たえ、数百年斧の入れたことのない鬱うったる深林の上を見越しに近郊の田園を望んで楽しんだことも幾度であるか解りませんほどでした。

或日曜の午後と覚えて居ます、時は秋の末で大空は水の如く澄んで居ながら野分のわ吹きすさんで城山の林は烈はげしく鳴って居ました。私は例の如く頂上に登って、やや西に傾いた日影ひかげの遠村近郊を明く染めて居るのを見ながら、持って来た書物を読んで居ますと、突然人の話声が聞えましたから石垣の端はしに出て下を見下みおろしました。別に怪しい者でなく三人の小娘が枯枝を拾って居るのでした。風が烈しいので得物えものも多いかしてたくさん背せなかに負しよつたまゝなおも四辺あたりをあさって居る様子です。むつまじげに話しながら樂しげに歌いながら拾って居ます。それがいづれも十二三、多分何村あたりの農家の子供でしょう。

私は暫時見下して居ましたが、又もや書物の方に

眼を移していつか小娘のことは忘れてしまいました。するとキャツという女の声、驚いて下を見ますと、三人の子供は何に懼れたのか枯木を背負たまゝアタフタと逃げ出してたちまち石垣のかたにその姿を隠してしまいました。可怪なことゝ私はその近処を注意して見下して居ると、薄暗い森の奥から下草を分ながら道もない処を此方へやって来る者があります。初は何物とも知れませんでした、森を出て石垣の下に現われた処を見ると十一か十二歳と思わるる男の児です。紺の筒袖を着て白木綿の兵児帯を締めて居る様子は農家の児でも町家の者でもなさそうでした。

手に太い棒切を持って四辺をきよろしく見廻して居ましたが、フト石垣の上を見上げた時思わず二人は顔を見合しました。子供は熟と私の顔を見つめて居ましたが、やがてニヤリと笑いました。その笑が尋常でないのです。生白い丸顔の、眼のぎよろりと

した様子までが唯の子供でないと私はすぐ見て取りました。

『先生。何をして居るの?』と私を呼びかけましたので私もちよつと驚きましたが、元来私の当時教師を務めて居た町はごく小さな城下ですから、私の方では自分の教児の外の人を余り知らないでも土地の者は都から来た年若い先生を大概知って居るので、今この子供が私を呼びかけても実は不思議はなかったのです。そこへ気がつくや私も声を優しくして、『書籍を読んで居るのだよ、こゝへ来ませんか』と言うや、児童はイキなり石垣に手をかけて猿のように登りはじめました。高さ五間以上もある壁のような石垣ですから私は驚いて止めようと思つて居る中に早くも中程まで来て、手近の葛に手が届くとすらすらとこれを手繰つてたちまち私の傍に突立ちました。そしてニヤ／＼と笑つて居ます。

『名前は何と云うの?』と私は問いました。『六』

『六？ 六さんというのかね』と問いますと、児童は点頭いたまゝ例の怪しい笑を洩して口を少し開けたまゝ私の顔を気味の悪いほど熟視して居るのです。

『何幾かね、歳は？』と私が問いますと、怪訝な顔をして居ますから、今一度問返しました。すると妙な口つきをして唇を動かして居ましたが、急に両手を開いて指を折って、一、二、三と読んで十、十一と飛ばし、顔をあげて真面目に、

『十一だ』という様子は漸と五歳位の児の、ようよう数を覚えたのと少しも変らないのです。そこで私も思わず『能く知って居ますね』『母上さんに教ったのだ』『学校へゆきますか』『往かない』『何故往かないの？』

児童は頭を傾げて向うを見て居ますから考えて居るのだと私は思つて待つて居ました。すると突然児童はワア／＼と啞のような声を出して駈出ししました。『六さん六さん』と驚いて私が呼止めますと、

『鳥々』と叫びながら後も振りむかないで天主台を駈け下りてたちまちその姿を隠してしまいました。

(三)

私はその頃下宿屋住でしたが何分不自由で困りますから色々な人に頼んで、遂に田口という人の二階二間を借り、衣食一切のことを任すことにしました。

田口というのは昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のまゝに構えて有福に暮して居ましたのでこの二階を貸し私を世話してくれたのは少からぬ好意で在ったのです。

ところで驚いたのは田口に移った日の翌日、朝早く起きて散歩に出ようとすると城山で逢った児童が庭を掃いて居たことです。私は、

『六さん、お早う』と声をかけましたが、児童は私の顔を見てニヤリ笑つたまゝ草箒で落葉を掃き、言葉を出しませんでした。

日の経つ中にこの怪しい児童の身の上が次第に解つて来ました、と言うのは畢竟私が氣をつけて見たり聞いたからでしょう。

児童は名を六蔵と呼びまして田口の主人には甥に当り、生れついでに白痴であつたのです。母親というは四十五六、早く夫に分れました。実家に帰り、二人の児を連れて兄の世話になつて居たのであります。六蔵の姉はおしげと呼びその時十七歳、私の見るところではこれも亦た白痴と言つてよいほど哀れな女でした。

田口の主人も初の程は白痴のことを隠して居るようでしたが、何をいうにも隠し得ることで無いのですから、終に或夜のこと私の室に来て教育の話の末に甥と姪の白痴であることを話しだし、どうにかしてこれに幾分の教育を加えることは出来ないものかと私に相談をしました。

主人の語るところに依るとこの哀れなきようだい

の父親というは非常な大酒家で、その為に生命をも縮め、家産をも蕩尽したのだそうです。そして姉も弟も初の中は小学校に出して居たが、二人とも何一つ学び得ず、いくら教師が骨を折つても無益で、到底他の生徒と同時に教えることは出来ず、徒らに他の腕白生徒の嘲弄の道具になるばかりですから、却て氣の毒に思つて退学をさしたのだそうです。

成程詳しく聞いて見ると姉も弟も全くの白痴であることがいよく明白になりました。

然るに主人の口からは言いませんが、主人の妹、即ちきようだいの母親というも普通から見るとよほど抜けて居る人で、二人の子供の白痴の原因は父の大酒にもよるでしょうが、母の遺伝にも因ることを私は直ぐ看破しました。

白痴教育というが有ることは私も知つて居ますが、これには特別の知識の必要であることです。私から私も田口の主人の相談には浮かと思ひませんでした。た

だその容易でないことを話したゞけで止しました。

けれどもその後だん／＼おしげと六蔵の様子を見ると、いかにも気の毒でたまりません。不具の中にもこれほど哀れなものはないと思いました。啞、聾、盲などは不幸には相違ありません。言う能わざるもの、聞く能わざる者、見る能わざる者も、尚お思ふことは出来ます。思うて感ずることは出来ます。白痴となると、心の啞、聾、盲ですからほとんど禽獸に類して居るのです。ともかく、人の形をして居るのですから全く感じがない訳ではないが普通の人と比べては十分の一にも及びません。また不完全ながらも心の調子が整うて居ればまだしもですが、更に歪になつて出来て居るのですから、様子が余程變です、泣くも笑うも喜ぶも悲しむも皆な普通の人から見ると調子が狂つて居るのだからなお哀れです。

おしげはともかく、六蔵の方は児童だけに無邪気なところが有りますから、私は一倍哀れに感じ、人

の力で出来ることならばどうにかして少しでもその智能の働きを増してやりたいと思うようになりました。

すると田口の主人と話してから二週間も経つた後のこと、夜の十時ごろでした、もう床に就こうかと思つて居るところへ、

『先生、お寝ですか』と言いながら私の室に入つて来たのは六蔵の母親です。背の低い、瘦形の、頭の小さい、凸の顔、いつも齒を染めて居る昔風の婦人。口を少し開けて人のよさそうな、たわいのない笑をいつもその眼尻と口元に現わして居るのがこの人の癖でした。

『そろ／＼寝ようかと思つて居るところです』と私と言う中、婦人は火鉢の傍に坐つて、

『先生私は少しお願が有るのですが』と謂つて言い出しにくい様子。『何ですか』『六蔵のことで御坐います。あのような馬鹿ですから将来のことも案じら

れて、それを思う私は自分の馬鹿を棚に上げて、六蔵のことが氣にかゝってならないので御坐います』『御尤です。けれどもそうお案じなさるほどのことも有りますまい』とツイ私も慰めの文句を言うのはやはり人情でしょう。



私はその夜だん／＼と母親の言う処を聞きました。が何よりも感じたのは親子の情ということでした。前にも言った通りこの婦人とてもよほど抜けて居ることは一見して解るほどですが、それが我子の白痴を心配することは普通の親と少しも変らないのです。

そして母親も亦た白痴に近いだけ、私は益々憐れを催おしました。思わず私も貰い泣きをした位でした。そこで、私は六蔵の教育に骨を折って見る約束をして氣の毒な婦人を帰し、その夜は遅くまで、いろ

いろと工夫を凝らしました。さてその翌日から散歩ごとに六蔵を伴うことにして、機に応じて幾分かずつ智能の働きの加えることに致しました。

第一に感じたのは六蔵に数の觀念が欠けて居ることです。一から十までの数がどうしても読めません。幾度も繰返して教えれば、二、三と十まで口で読み上げるだけのことはしますが、路傍の石塊を拾うて三個並べて、幾個だときゝますと考がえてばかり居て返事をしないのです。無理にきくと初は例の怪しげな笑方をして居ますが後には泣きだしそうになるのです。

私も苦心に苦心を積み、根氣よく務めて居ました。或時は八幡宮の石段を数えて昇り、一、二、三と進んで七で止り、七だよと言ひ聞して、さて今の石段は幾個だとききますと、大きな声で十と答える始末です。松の並木を数えても、菓子を褒美にその数を教えても、結果は同じことです。一、二、三という

言葉と、その言葉が示す数の観念とは、この児童の頭に何の關係をも有^もつて居ないのです。

白痴の数の観念の欠けて居ることは聞いて居ましたが、これほどまでとは思ひもよらず、私も或時は泣きたい程に思い、児童の顔を見つめたまゝ涙が自然に落ちたこともありました。

しかるに六蔵はなか／＼の腕白者で、悪戯^{いたづら}をするときは随分人を驚かすことがあるのです。山登りが上手で城山を駈廻るなどまるで平地を歩くように、道のあるところ無い処、サッサと飛ぶのです。ですから従来^{これまで}も田口の者は六蔵はどこへ行つたかと心配して居ると昼飯^{ひるめし}を食つたまゝ出て日の暮方になつて城山の畦^{がけ}から田口の奥庭^{おくにわ}にひょくくり飛び下りて帰つて来るのだそうです。木拾いの娘が六蔵の姿を見て逃げ出したのは必定^{きつと}これまで幾度となくこの白痴の腕白者に嚇^{おど}されたものと私も思い當つたのであります。

けれどもまた六蔵は直^じきに泣きます。母親が兄の手前を兼ねて折り／＼痛^{ひど}く叱^{おこ}ることがあり、手の平^{ひら}で打つこともあり、その時は頭をかゝえ身を縮めて泣き叫びます。しかし直ぐと笑つて居る様は打たれたことを全然^{すつかり}忘れて終^{しま}つたらしく、これを見て私はなおさらこの白痴の痛^{いた}ましいいことを感じました。

かゝる有様ですから六蔵が歌など知つて居る筈も無さそうですが知つて居ます。木拾いの唄うような俗歌^{ぞうか}を暗^{くら}んじて、おり／＼低い声でやつて居ます。

或日私は一人で城山に登りましたが、六蔵を伴^つれてと思ひましたが姿が見えなかつたのです。

冬ながら九州は暖国^{だんこく}ゆえ天気さえ佳^よければごく暖かで、空気は澄んで居るし、山のぼりには却て冬が可いのです。

落葉を踏んで頂^{いただ}に達し例の天主台の下までゆくと、寂々^{せきせき}として満山^{まんざん}声なき中に、何者か優しい声で歌うのが聞えます、見ると天主台の石垣^{かど}の角に六蔵が馬

乗に跨^{また}がつて、兩足をふらく動かしながら、眼を遠く放^{はな}つて俗歌を歌^うつて居るのでした。

空の色、日の光、古い城趾^{しろあと}、そして少年、まるで画^えです。少年は天使です。この時私の眼には六蔵が白痴^{ばち}とはどうしても見えませんでした。白痴^{ばち}と天使、何^{なん}という哀れな対照^{たいざう}でしょう。しかし私はこの時、白痴^{ばち}ながらも少年はやはり自然の児であるかと、つくづく感じました。

今一ツ六蔵の妙な癖^{くせ}をいいますと、この児童は鳥が好^{この}で、鳥さえ見れば眼の色を変えて騒^{さわ}ぐことです。けれども何を見ても鳥^{からす}といい、いくら名を教^{おし}えても憶^{おぼ}えません。『もず』を見ても『ひよどり』を見ても鳥といえます。可笑^{おかし}いのはある時白鷺^{しらさぎ}を見て鳥といったことで、鷺^{さぎ}を鳥にいい黒^{くろ}めるという俗諺^{ぞくげん}がこの児^こだけに普通^{あたりまえ}なのです。

高い木の頂^{てん}辺^{ぺん}で百舌鳥^{もず}が鳴いて居るのを見ると六蔵は口をあんどり明^あけて熟^{じつ}と眺^{なが}めて居ます。そして

百舌鳥の飛立^とつてゆく後^{あと}を茫然^{ぼうぜん}と見送^{みおく}る様^{よう}は、頗^{すこ}る妙^{せう}で、この児童には空を自由に飛ぶ鳥がよほど不思議^{ふしぎ}らしく思^{おも}われまじた。



さて私もこの憐^れれな児^この爲^{ため}めには随^{ずい}分^{ぶん}骨^{こつ}を折^よつて見^みましたが眼に見えるほどの効^{きう}能^{のう}は少しも有^ありませ^なでした。

彼^{かれ}是^{これ}するうちに翌^{あした}年の春^{はる}になり、六蔵の身^みの上に不慮^{ふりょ}の災難^{さいなん}が起^おりました。三月の末^{ひるすぎ}で御座^{ござ}いました、或^{ある}日朝^{あさ}から六蔵の姿^{すがた}が見えませんが、昼過^{ひるすぎ}になつても帰^{かえ}りません、遂^{つい}に日暮^{ひるすぎ}になつても帰^{かえ}つて来^きませんから田口^{たぐち}の家^{いえ}では非常^{ひじょう}に心配^{しんぱい}し、殊^{こと}に母親^{はは}は居^ゐても起^たつても居^ゐられん様^{よう}子^こです。

そこで私は先^まず城山^{じやうざん}を探^{たづ}すが可^よかろうと、田口^{たぐち}の僕^{ぼく}を一人連^つれ、提灯^{ちとう}の用意^{ようい}をして、心^{こゝろ}に怪^{あや}しい痛^{いた}しい想^{おも}を懷^{いだ}きながら平^{ひら}常^{じょう}の慣^なれた徑^{みち}を登^{のぼ}つて城趾^{しろあと}に達^{いた}し

ました。

俗に虫が知らすというような心持で天主台の下に
来て、

『六さん！ 六さん！』と呼びました。そして私と僕と、申し合わせたように耳を聳もはだてました。場所が城趾であるだけ、また索さがす人が普通なみの児童こどもでないだけ、何とも知れない物すごさを感じました。

天主台の上に出て、石垣いしの端はしから下をのぞいて行く中に北の最も高い角かどの真下に六蔵の死骸が墜おちて居るのを発見しました。

怪談でも話すようですが実際私は六蔵の帰りの余り遅いと知ってからは、どうもこの高い石垣の上から六蔵の墜落して死んだように感じたのであります。余り空想だと笑われるかも知れませんが、白状しますと、六蔵は鳥のように空を翔かけ廻めぐる積つもりで石垣の角から身を躍はらしたものと、私には思われるのです。木の枝に来て六蔵の眼のまえまで枝から枝へと

自在じざいに飛んで見せたら、六蔵は必定きつと、自分もその枝に飛びつこうとしたに相違ありません。

死骸なきがらを葬なまった翌々日、私は独ひとり天主台に登りました。そして六蔵のことを思うと、いろ／＼と人生不思議の思に堪たえなかつたのです。人類と他の動物の相違。人類と自然との関係。生命と死などいう、問題が年若い私の心に深い深い哀かなしみを起しました。

英国イギリスの有名な詩人の詩に『童わらべなりけり』というがあります。それは一人の児童が夕毎ゆうごとに淋しい湖水の畔ほとりに立つて、両手の指を組み合あわして、鼻はなの啼なくまねをすると、湖水の向むかうの山の鼻がこれに返事をする、これをその童わらべは樂たのしみにして居ましたが遂ついに死にまつして静かな墓はかに葬うられ、その靈たまは自然の懷ふところに返ったという意いを詠うたじたものであります。

私はこの詩が嗜すきで常に読んで居ましたが、六蔵の死を見て、その生涯を思うて、その白痴を思う時は、この詩よりも六蔵のことは更に意味あるように

私は感じました。

石垣の上に立って見て居ると、春の鳥は自在に飛んで居ます。その一つは六蔵ではありませんまいか。よし六蔵でないにせよ。六蔵はその鳥とどれだけ異って居ましたろう。

*

*

*

*

*

*

憐れな母親はその児の死を却て、児のために幸福だといながらも泣いて居ました。

或日のことでした、私は六蔵の新しい墓にお詣りする積りで城山の北にある墓地にゆきますと、母親が先に来て居て頻りと墓の周囲をぐる／＼廻りながら、何か独語を言っている様子です。私の近づくのを少しも知らないと見えて、

『何だってお前は鳥の真似なんぞした、え、何だって石垣から飛んだの？……だって先生がそう言ったよ、六さんは空を飛ぶ積りで天主台の上から飛んだ』

のだった。いくら白痴でも鳥の真似をする人がありますかね』と言って少し考えて『けれどもね、お前は死んだほうが可いよ。死んだほうが幸福だよ……』

私に気がつくや、

『ね、先生。六は死んだほうが幸福で御座いますよ、』と言って涙をハラ／＼とこぼしました。

『そういう事も有りませんが、何しろ不慮の災難だからあきらめるより致方がありませんよ……』

『けれど何故鳥の真似なんぞしたので御座いますう』

『それは私の想像ですよ。六さんが必定鳥の真似をして死んだのだから解るもんじゃありません』

『だって先生はそう言ったじゃ有りませぬか』と母親は眼をすえて私の顔を見つめました。

『六さんは大変鳥が嗜であつたから、そうかも知れないと私が思っただけですよ』